



明日への挑戦

大谷 實 (総長) 著

成文堂
1,800円

著者は、学校法人同志社総長であり、我が国を代表する刑事法学者であるが、この度古希を迎えられて、「自らの古希を心に刻んで、明日に挑むという思い」で著されたのが本書である。

本書の主題は、個人主義の血肉化、幸福の追求、人生行路、人生の目的である。個人の尊重と民主主義が現代の重要な原理であり、「21世紀への挑戦は、個人主義の一層の推進である」とされる。そのために、自己決定・自己責任の自覚、「個人主義の血肉化」が必要であり、「個人主義を蘇らせ、本当の意味での人権を確立するためには、人権保障の理念としての幸



表象と生のはざま

—葛藤する米英文学—

南雲堂
8,000円

山下 昇 (相愛大学文学部教授・山以下知郎 (大学文学部教授・佐々木隆 (大学アメリカ研究科教授・齊藤延喜 (大学文学部教授) 編著

本書は同志社大学文学部英文学科名誉教授岩山太次郎先生の退職記念論文集である。43編から成る英米文学の先鋭的な論考は、特に90年代以降、文学批評の要となったトランスアトランティック的な広い視座に立脚し、テクストに対する多角的な読みの可能性を切り拓く。

一見、無造作に配列されているかのように思われる論文群は、それぞれ、性差・人種、物語学、文化言説、空間の位相、テクストと歴史、ジャンルとメディアの6つの問題系ごとに、米から英へと時代を遡及するべく配置されている。つまり、各



知泉書館
8,000円

エックハルト ラテン語著作集II

—出エジプト記註解/知恵の書註解—

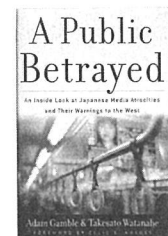
エックハルト著

中山善樹 (大学文学部教授) 訳

霊的知恵に満ちたドイツ神秘思想家マイスター・エックハルトのドイツ語説教は注目されるようになって久しいが、現代の研究においては、一般向けのこれらの説教における人間像は学問的ラテン語著作の理論の上に立っていると主張される。本書はエックハルト研究者中山善樹教授によるエックハルト・ラテン語全著作の邦訳(五巻)という画期的計画の最初の巻である。「出エジプト記」と「知恵の書」の註解、そして『雅歌』註解の短い断片が収められている。エックハルトは少数の聖句

福・追求権を自覚し、各人が自らの幸福追求に取り組むべきである。そして、著者にとつての幸福とは、人格完成を終生の目的とし、希望を持つて自らを絶えず高めることである、と述べられる。また、個人主義と公共の福祉を調整するものとしての「共生の思想」の重要性が指摘されている。教育についても、その理念は幸福追求権の確保であり、同志社の良心教育こそ、これに最も即するものなのである。

川本哲郎 (京都産業大学大学院
法務研究科教授)



Regnery Publications
27.95\$

A Public Betrayed

—An Inside Look at Japanese Media Atrocities and their Warnings to the West—

渡辺武達 (大学文学部教授)・Adam Gamble著

経済大国日本のメディア産業は高度な発達をしている。日本の新聞普及率は世界のトップだし、一人当たりのテレビ視聴時間、間もトップに近い。ところが、日本のメディアはどのような情報を読者・視聴者に伝えているのか。本書は週刊誌を直接の素材としながら、日本のメディアを総合的に考察、分析し、その問題点を抽出している。日本のメディアが事実を公正に報道するのではなく、ときにはおもしろおかしくするあまり、人権侵害をし、政治的配慮で過去の歴史を隠蔽するという仕方では日本の読者・視聴者を誤導している」と指摘する。これらメディアの

論は単独で自立性を保ちつつも、後発のナラティブと先行するそれとが時空を超えてインターテクスチュアリティを結びあうよう意図されているのだ。その過程で生じる地政学的、文化的緊張関係を論考に見出し、新しいテクストが正典にいかなる問いを投げかけ、再評価を促し、どのように互いが共鳴しあうのかを読み解くことこそ、本書の魅力の一つと言える。かくして、表象と自己との間に横たわる批評空間の構築を真摯に追求する論文群が、フランシス・キング、ノラ・オッジャ・ケラー、ブラハティ・ムカジを含み、またトニ・モリスンから始まった考察がヴァージニア・ウルフに触発された二人の日本人作家への探求をもつて締めくくられるとき、我々は、トランスアトランティックのみならず、トランスパシフィック的想像力をも内包する大著に圧倒されるに至る。本書の出版を心から喜びたい。

白川恵子 (大学文学部専任講師)



英宝社
4,000円

言語研究の接点

—理論と記述—

石黒昭博 (大学名誉教授・
山内信幸 (大学言語文化教育研究
センター教授) 共編

自然言語の研究はあらゆる角度、視点から多角的になされて初めてその本質が明らかになることは言うまでもないことである。昨今の言語研究はそれぞれの専門性がますます高くなり、そのため研究の視点が異なると、どのような成果が上がっているのか理解することは難しく、それゆえに、いかに有益な研究であっても無意味な批判に陥りがちで、真の言語研究には傷害にこそなれ、言語の本質解明に貢献するものとは成り得ない。そのような昨今の研究状況で、多岐に渡る視点から言語研究をとらえることは必要不可欠



新宿書房
2,000円

京都学ことはじめ

森 浩一 (大学名誉教授) 著

本書は、京都に長年暮らした著者が、多領域にまたがる12人の研究者たちと一緒に新たな勉強を行うことを目的とした対談集である。テーマは、京都という土地とそこに住んだ人びとを多方面から検討でき、京都から全国へ知的発信できるものばかりである。時間割は「第1章 古代への旅・京都から」の7話、「第2章 暮らしのなかの昔と今」の5話で構成される。それぞれひとつを紹介しよう。

京都の北、丹後・丹波には蒲島太郎、羽衣伝説の物語がある。これらは「丹後国風土記」などにあらわれ、随所に神仙思想と

いった中国的な要素が垣間見える。考古学的にみると、この地域は弥生時代以来、玉・鉄の手工業生産地帯、朝鮮半島を含む交流があり、大陸文化が根づいた土地柄であった。物語が生まれた背景には、このような地域性があつたようだ。最後に古代文学は作品の内容の他にも成立基盤や周辺を含めた研究が大切であると、しめくくる。

もうひとつは衣の話。京都といえば、祇園祭。山鉦町がもつ染織品は約900点ある。外国製は蝦夷錦、浄妙山のピラミッド織物、山伏山の中国官服などで、一枚一枚に深い歴史がある。京都の人びとには収集だけでなく、西陣にみるようなチャレンジ精神があつたようだ。京都の織物業は祇園祭のおかげで維持し、発展したという話もうなずけよう。

本書には、京都を歩く楽しさ、歴史を知る楽しさが、ガイドブックよりずっと満ちている。

堀 大介 (福井県朝日町教育委員会)



刀水書房
2,800円

ヴェネツィアの歴史

—共和国の残照—

永井三明 (大学名誉教授) 著

出版社の事情からであろいか、待ちに待ってようやく発刊された。この書は研究書のスタイルこそ取っていないが、その背後に膨大な史料・研究書による実証的裏付けをもつものとして歴史研究書と見なされよう。主著「ヴェネツィア貴族—意識と社会—」(刀水書房)から約10年が経過しているが、おそろしく同時進行して執筆されたものとして、また続編として、前著で扱わなかった18世紀の黄昏にかすむヴェネツィアの情景を描写し(本書の第2部、これが圧巻)、さらにそこに著者の本領が認められ、肉声さえ聞かれるがゆえに、まさに著者のライフワークにおける「姉妹作」と見

なされるべきである。

長年の西洋史研究において、政治・経済・思想・文化・社会などあらゆる領域に通曉した著者が、世界の中のほんの一点(しかし世界の最大的一点)であるヴェネツィアに焦点を据えて、とことんその「意識と社会(生活)」の深部に大胆なメスを入れた。ヴェネツィアは、はじめ気概あるゴンドリエーレによって巧みに操舵されて栄光の歴史の流れを進んで行くが、行き着く先は虚飾と仮面をかぶった特異な世界であつた。この書は、朝夕の通勤電車の行き帰りの時間さえも、珠玉の知的時間に変えてくれる書であり、読了後にはきつと人間と文明について考えさせてくれるだろう。世界遺産ヴェネツィアは、今日その特異な景観ゆえに最高の観光地であるが、我々「歴史の旅人」にとつても、人間の気概と思ひさが繰り広げられた歴史舞台としてまさに第一級の「観光地」なのである。

石坂尚武 (大学文学部教授)



成文堂
5,500円

企業の刑事責任

川崎友巳 (大学法学部助教授) 著

本書は、「深刻化する企業犯罪に対して刑法はどのような役割を果たすべきか」というテーマを扱った研究書である。法人である企業が犯罪行為を行った場合、その性質上、個人による犯罪とは異なる対応や考慮が必要となる。この「企業の刑事責任」の問題に関して、著者である川崎友巳氏はこれまで数々の優れた論稿を発表してきた。これに加筆修正を施して再構成するとともに、新たに書き下ろしたものを加えて完成したのが、本書である。

本書の最大の特長は、理論面、政策面、立法面など多角的な視点から企業の刑事責任の問題解

決に取り組んだところにある。たとえば、法人に対して刑事責任を問う理論的な根拠はどこにあるのか。企業を殺人罪や偽証罪によって処罰することも可能か。企業の刑事責任を論ずる上で企業自身のシステムすなわちコンプライアンス・プログラムはどのような役割を果たすのか。犯罪を行った企業にはどのような刑事制裁を科すことが有効か。企業犯罪に関する立法としてはどのような規定形式が適切か。本書はこれらの問題につき、わが国はもろろんのこと欧米の立法・判例・学説の状況を丹念に検討した上で自説を展開している。豊富な資料に基づく詳細な分析だけに、本書の結論には説得力がある。

ただ、若い著者にとつて本書は研究活動の一ステップにすぎない。今後、著者の研究がさらに発展し、続刊が出版されることを強く期待する。

十河太郎 (大学司法研究科助教授)



サンライズ出版
1,200円

近江商人学入門

—CSRの源流「三方よし」—
末永國紀（大学経済学部教授）著

本書は、近江商人研究の第一人者である著者が、広く一般向けに著した近江商人学の入門書である。

まず、近江商人の歴史的基盤、独自の経営手法を簡潔に説明した上で、個別商家の創業からその発展過程が具体的に紹介されており、初めて近江商人について学ぶ読者にも理解しやすい。さらに読み進むにつれ、その経営理念の奥深さ、肖像や写真の中に見る商人達の陶冶された人格から、彼らが乗り越えてきた艱難辛苦の山坂の多さを感じる。

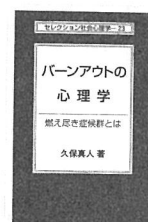
また本書は、時代区分として

は江戸・明治期を中心に著されているが、著者の眼が注がれているのはその先にある現在の経済社会である。企業の社会貢献や経済倫理が問われる今、著者は近江商人の到達した「三方よし」の経営精神こそ、経営における公的側面を強調した社会認識の源流の一つであると説く。

終章の衰亡譚は、近江商人の別の側面を描き出したものとしてまた興味深い。それと同時に、勤勉と正直、周囲との和合、信用、社会への責任と奉仕等、我々が日々の生活の中で忘れがちな徳目の大切さを再認識させ、これらが日本人の価値観の底流をなす本質的なものであることを気付かせてくれる。

企業とは、商いとは、働くとは、人の生き方とは：読者にいろいろと考えさせる興行と幅をもった書物である。

植田知子（京都学園大学非常勤講師）



サイエンス社
1,400円

バーンアウトの心理学

—燃え尽き症候群とは—
久保真人（大学政策学部助教授）著

フロイデンバーガーが学問的に取り上げて以来、「バーンアウト」概念は、ヒューマン・サービス従事者に起こる情緒的消耗感と冷淡な態度から成る症候群として認識され、膨大な実証的研究が出現した。本書を著した久保氏は、社会心理学の観点から「バーンアウト」現象の解剖を試みた先駆的研究者である。

本書は、膨大な「バーンアウト」研究の鳥瞰図を与えてくれるだけでなく、「バーンアウト」現象が実は組織科学や経営学などの分野にとっても重要である

ことを教えてくれる。さらに、ホックシールドを幹とする「感情労働」の社会学にも論は拡大し、幅広い視点をもつ久保氏の面目躍如といえよう。

超高齢化社会に突入したわが国では、「介護保険法」の制定に見られるように、「福祉の含み資産」として活用されていた「家族労働」がヒューマン・サービスとして専門的介護者によって代替される。つまり、ヒューマン・サービスに起因する「バーンアウト」が予防すべき差し迫った症候になったのである。

このような社会的状況を前提にすると、本書は、社会心理学が所謂「蛸壺」的学問ではなく、有用な実践的学問であることを十分に伝えてくれる好例といえる。

諸井克英（女子大学現代社会学部教授）



教文館
4,500円

アメリカン・ボード宣教師

—神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1869-1890年—
人文科学研究所編

本書は、過去15年間アメリカン・ボード本部幹事と来日アメリカ人宣教師との間で交わされた書簡を解説してきた同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会のアメリカン・ボード宣教師文書研究会が、社会学部の吉田亮教授を中心に最近の成果をまとめた論文集で、5年前に出版された研究書に続くものである。

特に、日本ミッションさらにはボード本部の伝道方針が、現地人による3大主義（自治自給自力伝道）から現地人と宣教師が役割分担しながら進める3代主義へと修正された過程が、日本ミッションの地方下部組織として位置づけられる神戸・大阪・京都の3ステーションの視点から見直されている。そして、

この伝道方針の修正はアメリカ人宣教師やボード本部のイニシアティブの結果であったとする従来の見解に対して、現地事情を反映する各ステーションの心情とステーション間の対立の力学を重視する新しい解釈を提供している。

本書を構成する13の論文はいずれも地道な研究活動に基づく労作で、3ステーションをベースに行動した男性・女性宣教師の活動や生活状況を各地域の歴史的、社会的コンテクストの中に描き出している。それらは論文集として、各ステーション独自の発展、さらにはステーション間の横のかかり及びステーション・ミッション・ボード本部間の縦のかかりの存在とその相互作用についても様々な示唆を提供してくれる。アメリカン・ボードの研究家のみならず、教会、伝道、異文化交流、地域史、教育、医療、音楽、ジェンダー等を研究するものには大変興味深い一冊であること間違いない。

安武留美（甲南大学助教授）
（一）来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究1869-1890—現代史料出版、1999年



書房
2,000円

科学技術の行方

—知の競争とヒューマン・セキュリティ—
石黒武彦（大学研究開発推進機構専任フェロー）著

今出川キャンパスのハリス理化学館には「SCIENCE」の文字が刻まれている。この建物が建てられたのは1890年であるが、科学の研究に携わる専門家の呼称として「scientist」という言葉が初めて使われたのはその数十年前のことであった。この時期に専門的職業として社会に位置づけられた科学は20世紀になって高度な技術を生み出し、人類に様々な恩恵をもたらしてきた。その一方で、地球環境問題や生命操作技術への不信、一般社会からの乖離と暴走への不安など、科学と科学技術の負の側面も顕著になってい

る。

本書は科学および科学技術の現状と生い立ちを総覧し、それらが社会に与える光と影、そして将来の展望を論じたものである。科学や科学技術のあり方についての書物はすでにいくつ出版されているが、多くは複数の著者の論考を編んだものである。それに対し本書では、物性物理学の研究と教育に携わりつつ科学技術の功罪を注視してきた著者独自の視点で科学と科学技術の姿が語られ、将来を考えるための枠組みが提示されている。特に、研究開発につきまとう知の競争や人間の安心と安全（ヒューマン・セキュリティ）という観点からも議論が展開されており、これらが科学技術と社会との関係が端的に表れる問題であることが理解できる。科学と技術を学ぶ者にとつてはもちろんのこと、人間の社会と文化の行方を考えるためにも本書は確固としたプラットフォームを与えてくれる。

林田 明（大学工学部教授）



筑摩書房
740円

図書館に訊け！

井上真琴（天学学術情報課）著

新しいパソコンや携帯電話などを買うと、いつもこう思う。この機器がもっている機能のうち、どの程度まで使いこなすことができるだろうか。自分には宝の持ち腐れなのではないかと。図書館も、これと似たようなところがある。

この本は、いわば、我々の図書館の使用効率を画期的に引き上げてくれるサプリメントである。著者の井上真琴さんは、図書館業務のエキスパートで、殊に選書・収書の見識は他の追随を許さない。またその人柄も、詳述が憚られるほどユニーク

で、それが行間にもあふれ出ている。まるで井上さんのエッセイを読んでいるような気にさせられる部分も多い。

もちろん図書館の活用方法についても、極めて充実した内容をもつ。めざす資料へ素早くたどり着くための方法が示されるだけではない。資料操作を通じての研究手法の指南にまで記述は及ぶ。この本は、基礎ゼミの役割をも果たすのである。

図書館とは、本の倉庫（ハード）ではなく、資料活用の手助け（ソフト）の機関なのだから、もっともつと使いこなしてほしい。その思いが、タイトルにも表れている。

世に、図書館について書かれた本は多いが、この本のように、「読ませ」て、かつ抜群に役に立つ本はめったに無い。常に書かれた言葉を繰り返しておこう。「こんな本がほしかった！」。

真銅正宏（天文学部教授）



平凡社
780円

宮崎駿の『深み』へ

村瀬学（女子大学生活科学部教授）著

この著書の面白い点は、「作品の説明を、宮崎さんの『説明』を使っただけ」ことが心がけられている所にある。宮崎駿本人が説明していない解釈をあえてしていくという試み。

たとえば、「天空の城ラピュタ論」。天に浮かぶ島はかつて強大な軍力を持っていたにもかかわらず、なぜ滅んでしまったのか。この問いとそれへの解釈が面白い。解釈の根拠を著書全体の根底にある「有機的世界観」からの考察と、前作の「風の谷のナウシカ」からの流れを用いて非常に説得力のある説明をしている下り。解釈の広がりを持つ面白さに引き込まれてし

まう。

また「となりのトトロ論」では、ある物語を「物語」を通して見ることで、物語が様々な姿を変えて現われてくるという面白さが論じられている。そのわかりやすい例が、サツキやメイには見えるトトロがなぜカンタや村の子どもたちには見えないのか、という問いとその理由として語られる。カンタや村の子どもたちはトトロを見出す元となる「物語」を持っていなかったから、と。この解釈から「物語」を通して物語を見れば物語は決して一元的ではないということがわかる。

作品を見るということは物語の筋を単に追うだけではない。物語を通して解釈し、新たな物語を築きあげることにも楽しさがある。この書は、物語の持つ「深み」、人間の中にある「深み」を宮崎駿の作品を通して教えてくれる。

熊田優子（女子大学04年卒業）



Honore Champion

Les confessions de Jean-Jacques Rousseau en France (1770-1794)

「フランスにおけるルソーの『告白』」
桑瀬章二郎（天学学術情報課）著

本書は著者の長年の研究成果として、フランスで出版されたものである。2004年度の沢・クロード賞特別賞を受賞したことで、日本でも大いに話題に上ったのは記憶に新しい。

18世紀後期におけるルソーの影響は多くの研究者によって語られてきた。フランス革命史や文学史の研究者がルソーを扱う場合、その政治原理の実践について、そしてまた「感じやすい魂」を持つ『新エロイズ』の作者に対する熱狂的な反応について考察するというスタンスが一般的だった。つまり、一方ではパンテオンに埋葬された偉大な思想家としてのルソーが、ま

た一方ではロマン主義的な感受性の出現を象徴する『新エロイズ』の作者が特権化されてきたのである。

しかしこうした態度においては、ルソーが登場することで起きた、ある未曾有で不可思議な事態、すなわち一般の読者が『告白』という一冊の書物に対し特異な反応を表明したという事態が説明できない。本書はそうした反応が具体的にどのようなものだったかを、幅広い資料を元に再構築することに成功している。発表当時の様子を証言する貴重なテキストを使うことで、これまで語られることの少なかった古典的テキストの受容の問題を見事に扱っている。そしてこうした自伝文学の受容という観点から、18世紀後半のルソー主義について新しい解釈を提示しているのがある。その意味で本書は、作家の受容研究に対する重要な貢献となるであろう。

早川文敏（天学言語文化教育研究センター嘱託講師）



日本キリスト教団出版会
800円

聖書資料集

富田正樹（香里中高校教諭）著

かねてより日本キリスト教団出版局の方が来校される度に、中高生向けの資料集が欲しいとお願いしていた。「では先生が資料集を書いてください！」との勧めにも、「いや、そんな時間はありません」と固辞していた私は、「聖書資料集」を手にして、自らの怠慢の甚だしさにただ恥じ入るのみである。この度敬愛する同僚者富田正樹先生が「新約聖書—キリスト教との出会い」の刊行から間をおかず「聖書資料集」を出版されたことは、私はもとより一緒に聖書を読む生徒たちにとっても喜ばしい限りである。聞くところによ

ると、先生の手元にはご自身が作成した膨大な資料集がありながら、そこから厳選された一部が資料集として編集されたとのこと。地図、年表、写真など、どれも視覚的に分かりやすく配置され、歴史的事柄や人物についての説明もコンパクトで、的を得たものになっている。こうした編集努力からも、授業準備に相当な時間と労力が費やされていることはもちろん、いかに先生が生徒との「対話」を大切にしながら授業を展開しているかが伺えよう。出版されたらこんなにこんなことを書くのは気が引けるのだが、おそらく改訂版を出されるであろうことを予想して一つだけ要望を。資料集をきっかけにさらに学びを深められるように、巻末に参考文献、辞書、辞典などを紹介してくだされば、いっそう資料集としての役割を果たすことになるかと思う。大いに期待するところである。

桜井 希（中学校教諭）